

2026年度第5回(10月)北辰テスト対策予想問題【C版】

国語(制限時間50分・100点満点)

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

中学三年生の「私」は、母が入院したため、父と二人で暮らしている。

母が入院して、三週間がたった。

弁当を作るのは、父の役目になった。父は料理がうまくない。最初の日の弁当は、ご飯の上に焼いた卵がのっているだけだった。教室でふたを開けたとき、①私はとつさに、弁当箱を体で隠すようにして食べた。

「今日の弁当、どうだった。」

夜、父は必ずそう聞いた。私は「ふつう」とだけ答えた。父は「そうか」と言つて、それ以上は何も聞かなかった。

二週目に入ると、弁当に変化が出てきた。卵焼きの形が少しずつ整ってきた。ある日はから揚げが入っていて、ある日はほうれん草のおひたしが入っていた。おひたしは、母がよく作っていたものだった。味は母のものとは違つたけれど、②私は箸を止めて、しばらくそれを見つめた。

その週末、洗濯物を干していると、台所の隅に一冊のノートが置いてあるのに気がついた。開いてみると、日付と、その日の弁当の中身と、「卵焼きは弱火」「ほうれん草はゆすぎない」というような、短い言葉が並んでいた。ところどころに、母の字で書いた付箋がはつてあった。「おひたしは、しょうゆを少しだけ」。母が病室から父に渡したものらしかった。

③私は、ノートをそつと閉じて、もとの場所に戻した。

月曜日の弁当は、卵焼きと、から揚げと、おひたしだった。教室でふたを開けると、隣の席の由紀が「おいしそう」と言つた。私は少し迷つてから、「父が作ったの」と答えた。言つてしまうと、思ったより簡単だった。

その夜、父はいつものように聞いた。

「今日の弁当、どうだった。」

「おいしかった。」

父は箸を持ったまま、少しの間動かなかった。それから、「そうか」と、いつもと同じ言葉を、

④いつもとは違う声で言つた。

「明日は、何がいい。」

父がそう聞いたのは、初めてだった。私は、ノートのことは言わずに、「卵焼き」と答えた。⑤父の卵焼きが、いちばん好きだと思つた。母ではなく、父のが。

問1 ①「私はとつさに、弁当箱を体で隠すようにして食べた」とありますが、このときの「私」の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア父の作った弁当を食べたくないという気持ちから、人目を避けている。

イ見た目の粗末な弁当を周りに見られるのが恥ずかしく、とつさに隠している。

ウ父への感謝の気持ちがあふれて、ひとりで静かに味わおうとしている。

エ弁当をだれにも分けたくないという気持ちから、独り占めしようとしている。

問2 ②「私は箸を止めて、しばらくそれを見つめた」とありますが、このときの「私」の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

アおひたしがまずくて、食べる気になれずにいる。

イ父が本当に自分で作ったのかと、疑いをもっている。

ウ母がよく作っていた料理を父が作ろうとしていることに気づき、心を動かされている。

エ母に早く会いたいという思いで、頭がいっぱいになっている。

問3 ③「私は、ノートをそつと閉じて、もとの場所に戻した」とありますが、このときの「私」はどのような気持ちでしたか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、努力、母の二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ④「いつもとは違う声で言った」とありますが、このときの「父」の様子を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア初めて「おいしかった」と言われたことがうれしく、その気持ちをかみしめている。

イ「私」が本心から言っているのかどうか、疑っている。

ウいつもと同じ返事しかできない自分に、不機嫌になっている。

エ「私」の返事がよく聞き取れず、聞き返そうとしている。

問5 ⑤「父の卵焼きが、いちばん好きだと思った」とありますが、このときの「私」の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア父の料理の腕が母より上になったことを、誇らしく思っている。

イ母の料理が食べられないことへの不満を、父の料理でまぎらわせている。

ウ卵焼き以外のおかずには食べ飽きたので、卵焼きだけを望んでいる。

エ母の味と比べるのではなく、自分のために努力を重ねてきた父の弁当を、そのまま受け入れている。

問6 本文の内容や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～オの中からすべて選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア「今日の弁当、どうだった。」「そうか」という同じやりとりをくり返し、最後にその変化を示すことで、父と「私」の関係の変化が印象づけられている。

イ弁当の感想が「ふつう」から「おいしかった」に変わることで、「私」の心の変化が表現されている。

ウ入院中の母と「私」の会話を通して、母の心情がくわしく描かれている。

エ本文は父の視点から語られており、娘に受け入れられない父の悩みが物語の中心になっている。

オノートと母の付箋という小道具によって、父と母のつながりが直接の会話なしに示されている。

2

問1(1) 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)
新しい制度を促す。(読み)

問1(2) (2点) 友人の言葉に慰められる。(読み)

問1(3) (2点) 実験のカテイを記録する。(書き)

問1(4) (2点) 駅までの道をタズねる。(書き)

問2(1) 次の(1)・(2)の――部のかたかなを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を答えなさい。(各2点)
新製品のコウ告を見る。

ア練習のコウ果が出る。

イ道路のコウ事が始まる。

ウコウ歌を合唱する。

エコウ大な土地が広がる。

問2(2) (2点) 意見のソウ違を話し合う。

ア物語をソウ作する。

イ先生にソウ談する。

ウソウ別会を開く。

エ未来をソウ像する。

問3 次の文章中の――部アゝカの「れる・られる」の中から、意味が受け身であるものをすべて選び、その記号を答えなさい。(3点)

「朝、先生に呼ばれて職員室へ行った。昔のことが思い出される廊下だ。先生は、私の作文が地域の文集に載せられると教えてくださった。校長先生も読まれたそうだ。私は、うれしくてすぐには言葉が出られなかったが、この作文なら人前でも読まれる自信がある。」

――部: ア呼ばれ／イ思い出される／ウ載せられる／エ読まれた／オ出られ／カ読まれる

問4 次のアゝエの文の――部「ない」の中から、助動詞であるものを一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

ア今日は時間がない。

イ雨の日は客が少ない。

ウ弟は決して走らない。

エこの道は危なくない。

問5 次の文の空欄にあてはまることわざとして最も適切なものを、あとのアゝエの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

計画を立てるだけで動かないのはよくない。「――」というように、まずやってみることが大切だ。

ア石橋をたたいて渡る

イ急がば回れ

ウ案ずるより産むがやすし

エ猿も木から落ちる

問6(1) N中学校の三年二組では、国語の授業で「私が大切にしていること」というテーマでスピーチを行います。次は、Aさんが書いた「スピーチの原稿」です。これを読んで、あとの(1)～(3)に答えなさい。

【スピーチの原稿】

私が大切にしていることは、「相手の話を最後まで聞くこと」です。

私は、以前は人の話を途中でさえぎって、自分の意見を言うてしまうくせがありました。ある日、友人に「あなたと話すと、最後まで聞いてもらえない気がする」と言われました。そのとき、私はとても「――」。

それから私は、相手が話し終わるまで口をはさまないようにしました。すると、不思議なことに、相手の話の中に、自分が思いつかなかった考えがたくさんあることに気づきました。

皆さんも、だれかと話すときに、相手の言葉を最後まで受け止めてみてください。きっと、「――II――」。

(1) スピーチの原稿の空欄「I」にあてはまる表現として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(3点)

アうれしくなりました

イはっとしました

ウ腹が立ちました

エ安心しました

問6(2) Aさんのスピーチの原稿の構成の工夫として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア最初に結論を述べてから、そう考えるようになった体験を具体的に話し、最後に聞き手へ呼びかけている。

イ複数の体験を比較して、どちらが正しいかを聞き手に判断させている。

ウ統計の数値を示して、自分の考えの正しさを客観的に証明している。

エ結論を最後まで明かさないうことで、聞き手の興味を引きつけている。

問6(3) スピーチの原稿の空欄「II」にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(2点)

ア自分の意見をはっきり言えるようになるはずです

イ話がすぐに終わって、時間を節約できるはずです

ウ相手があなたの意見に賛成してくれるはずです

エ自分では思いつかなかった考えに出会えるはずです

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(28点)

知りたいことがあれば、すぐに調べられる。行きたい場所があれば、地図が道順を教えてくれる。私たちは、①「わからない」という時間をほとんど持たずに済む道具を手に入れた。それは間違いなく便利であり、私自身、毎日その恩恵を受けている。

しかし、便利さの裏側で、静かに失われているものがあるように思う。それは、「わからないままでいる力」である。

子どものころ、私は父と山道を歩いていて道に迷ったことがある。地図はあったが、どちらに進めばよいのか判断がつかない。父は、「太陽の位置と、沢の音を聞いてみる」と言った。私たちは立ち止まり、耳をすまし、空を見上げた。結局、正しい道にたどり着くまでに一時間近くかった。だが、そのとき見た木々の形や、沢の音の方向は、今でもはっきりと覚えている。

もしあのとき、地図が音声で道順を教えてくれていたら、私たちは迷わなかっただろう。そして、あの山道のことを何一つ覚えていかなかっただろう。②迷うことは、その場所を自分のものにする^①ことでもあったのだ。

道具が答えをすぐに与えてくれるとき、私たちは、答えにたどり着くまでの過程を飛ばしている。過程を飛ばせば、速く進める。けれども、過程の中にこそ、観察し、比べ、考えるという営みがある。答えだけを受け取り続けていると、③いつのまにか、自分の頭で考える筋肉が細くなっていく。

誤解のないように言えば、私は便利な道具を捨ててよと言いたいのではない。道具は使えばよい。問題は、道具に「わからない時間」まで奪わせてしまうことにある。調べる前に、少しでも自分で予想してみる。答えを見る前に、なぜそうなるのかを考えてみる。そのわずかな時間が、考える力を保つ。

技術は、これからも私たちの「わからない」を減らし続けるだろう。それ自体は歓迎すべきことである。ただ、④「わからない」を全部なくしてしまつてよいのかと、私は問いたい。わからないという状態は、不便であると同時に、人が最も考える瞬間でもあるからだ。

便利な道具と、考える力。この二つは対立するものではない。道具に頼りながらも、ときどき立ち止まって、自分の頭で迷ってみる。そういう使い方ができる人こそが、道具を本当に使いこなしているのだと、私は思う。

問1 ①『『わからない』という時間をほとんど持たずに済む道具』とありますが、筆者はこのような道具をどのようにとらえていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア生活を便利にする道具であり、積極的に使うべきだと全面的に評価している。

イ人間の考える力をうばう有害な道具であり、使うべきではないと否定している。

ウ便利で自分も恩恵を受けていると認めつつ、その裏側で失われるものがあると考えている。

エ便利ではあるが、多くの人はその使い方を理解できていないと批判している。

問2 ②「迷うことは、その場所を自分のものにするでもあった」とありますが、筆者がこのように言う理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 迷ったことで自分の目や耳を使って周囲を観察し、その場所を深く記憶することができたから。

イ 迷ったおかげで、地図を正しく読む技術を身につけることができたから。

ウ 迷った経験によって、父との関係が深まったから。

エ 迷うことの危険さを知り、二度と迷わないように注意するようになったから。

問3 ③「いつのまにか、自分の頭で考える筋肉が細くなっていく」とありますが、これはどのようなことですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、過程、考えるの二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

問4 ④『わからない』を全部なくしてしまつてよいのか」とありますが、筆者がこのように問いかける理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 技術の進歩をこれ以上進めるべきではないと考えているから。

イ 道具はいつか壊れるので、道具なしで生きる練習が必要だから。

ウ 不便さを楽しむことが、豊かな生活につながるから。

エ 「わからない」状態は不便だが、人が最も考える瞬間でもあり、それを失うと考える機会がなくなるから。

問5 本文の構成や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 冒頭で道具の便利さを認めたうえで、「しかし」と話を転じて、失われるものに目を向けさせている。

イ 山道で迷った話は専門家の意見として引用され、主張に客観性をもたせている。

ウ 「考える筋肉が細くなる」という比喻によって、考える力がおとろえていくことをわかりやすく表している。

エ 「便利な道具を捨ててよと言いたいのではない」と述べて、自分の主張が誤解されないように範囲を限定している。

問6 本文に述べられている筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

ア 考える力を守るためには、便利な道具をできるだけ使わないようにするべきである。

イ 道具が答えを与えてくれる時代には、自分で考える必要はなくなっていく。

ウ 便利な道具に頼りながらも、ときには自分の頭で考える時間を持つことが、道具を本当に使いこなすことである。

エ わからないことは道具に任せ、人間は道具にできないことだけを考えればよい。

4 次の文章は『平家物語』の一節で、屋島の戦いのさなか、平家が舟の上に立てた扇的を、源氏の武士である那須与一（なすのよいち）が射るように命じられた場面です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。（カッコ内は口語訳です。）（16点）

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りする漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。（ころは二月十八日の午後六時ごろのことであつたが、ちょうど北風が激しく吹いて、磯に打ち寄せる波も高かつた。舟は、上下に揺れて漂うので、扇も竿の先に定まらずひらひらと動いていた。沖では平家が、舟を一面に並べて見物している。陸では源氏が、馬のくつわを並べてこれを見ている。）

与一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、①願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。」と心のうちに祈念して、②目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。（与一は目を閉じて、「南無八幡大菩薩、わが国の神々、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、どうか、あの扇の真ん中を射させてくださいませ。これを射損じるようなら、弓を切り折って自害して、人に二度と顔を向けることはできません。もう一度故郷へ帰らせようとお思ひになるなら、この矢ははずさせないでください。」と心の中で祈って、目を開くと、風も少し吹き弱まって、扇も射やすそうになっていた。）

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。（与一は、かぶら矢を取つてつがえ、十分に引きしぼつてひようと放つた。小柄な武士とはいえ、矢の長さは十二束三伏、弓は強く、浦一帯に響くほど長く鳴り響いて、あやまたず扇の要から一寸ほど離れたところを、ひいふつと射切つた。かぶら矢は海に落ち、扇は空へと舞い上がった。しばらくは空中にひらめいていたが、春風に一もみ二もみともまれて、海へさつと散り落ちた。）

③沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり。陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。（沖では平家が、舟のふちをたたいて感嘆した。陸では源氏が、矢入れをたたいてどよめいた。）

（注）酉（とり）の刻……午後六時ごろ。 くし……扇を立てた竿。 くつばみ……馬のくつわ。 かぶら……かぶら矢。 射ると音を立てる矢。 十二束三伏（じゅうにそくみつぷせ）……矢の長さ。 ふつうより長い。 要（かなめ）……扇の骨をとめる部分。 えびら……矢を入れて背負う道具。

問1 「向かふ」を、現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。（4点）

問2 ①「願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ」とありますが、この祈りに続けて与一が神に誓った内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

ア 射損じたら、すぐに都へ戻って修行をやり直す。

イ 射損じたら、弓を切り折って自害し、二度と人前に顔を出さない。

ウ 射当てたら、平家から褒美をもらって故郷に帰る。

エ 射損じたら、もう一度矢を射させてもらう。

問3 ②「目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける」とありますが、与一が目を開いたときの状況を次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、現代語で十字以上、二十字以内で書きなさい。(4点)

問4 次は、この文章を読んだあとのBさんと先生の会話です。空欄にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(4点)

【会話】

Bさん「与一が扇を射たあと、③『沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり。陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり』とありますね。」

先生「そうですね。この場面で、敵である平家までもが感嘆したのはなぜだと思いますか。」

Bさん「一からだと思います。」

ア 与一の矢を見て、平家が勝負をあきらめた

イ 与一は、もともと平家の味方だった

ウ 敵味方の区別をこえて、風の中で小さな扇を射切った技の見事さに感動した

エ 大切な扇が海に落ちて、平家がほっとした

(以上で問題は終わります。)